

国際ファッション専門職大学

2022年度・第2回公開講座 @ZOOMウェビナー

Admission
Free! 参加
無料

2023.

Start time.

2.25 sat 13:00 >> 14:30

参加の申し込みは、下記URLより受付中!

※QRコードからもアクセス可能です。

申し込み ▶ <https://onl.tw/HLsxsZL>

Lecture title ▶ ヨーロッパの文化・芸術の諸相



Speaker.
Masao Yamamoto

ジェントルマン文化の華——英国近代競馬の成り立ち

競馬場へ初めて行かれた方は、コース一面に広がる深い芝生の緑に吃驚されます。そして色とりどりの上着をまとった騎手を背に、筋肉隆々のサラブレッドが全力で走る。そのたくましい光景を目の当たりにすると、さらに驚かれます。今日、世界中で行われている競馬競走は、そのほとんどが英国をモデルとしたもので、それらの光景もこの200年来、変わらぬ姿なのです。英国は近代競馬の発祥国とされる所以です。こうした歴史が生まれた背景には、英国独特の貴族・ジェントルマンが存在しています。かれらの日常生活は非労働時間、つまり、乗馬や狩猟、競馬などの「社交生活」に充てられていました。また、多くのスポーツにパトロンとして関わり、近代スポーツの発展にも寄与しています。ゴルフ、テニス、サッカーなどもそうした土壌の中から生まれてきたものです。それらの端緒となったのが、じつは競馬でした。18世紀、現在まで続く競馬発祥のおはなし。短い時間ではありますが、ふだん接することのない競馬の世界をお楽しみください。

ロダンの《考える人》は何を考えているのか?

——モニュメント(記念像)からパブリック・アート(公共芸術)へ

「考える人」と聞くと、ロダンのブロンズ製の座像を思い浮かべる人が多いかと思います。世界中にいくつもありますが、この作品を実際に見ていなくても皆さんの頭の中にいつしかインプットされています。価値づけられたイメージ情報としてです。さて皆さんは「考える」ときにどのような恰好をしますか? ロダンの「考える人」はなぜ、男性で、裸で、座って、筋肉逞しく、苦しそうなのでしょうか。試みにあの格好(美術では「ポーズ」といいます)をしてみてください。あの「考える人」はなぜそう呼ばれているのでしょうか? どこからきたのでしょうか? 何を考えているのでしょうか? これが人形(ひとがた)の「記念像(モニュメント)」(日本では「銅像」と呼ばれたりします)だとすると、昨今街頭や広場に設置されている「パブリック・アート(公共芸術)」はもはや人形でもなく、どうなっているのでしょうか? 公共空間の造形物の意味について、「考える人」から始めて、作家・作品論、図像学、造形理論、受容論を駆使して迫ります。



Speaker.
Koji Takahashi

▶ 山本 雅男(国際ファッション専門職大学教授)

中央大学文学部哲学科卒業。静岡県立大学国際関係学部、日本大学芸術学部を経て、現職。専門はヨーロッパ近代論、英国文化史。日本に大きな影響を与えたヨーロッパの近代とはいったい何だったのかというテーマが底流にあり、英国競馬への関心はそのケース・スタディーの位置づけ。主要著作は『ヨーロッパ近代の終焉』、『近代文化の終焉』、『ダービー卿のイギリス』(JRA 馬事文化賞)、『競馬の文化誌』、『イギリス競馬と近代競馬』など。翻訳として『同性愛の文化誌』、『倫敦路地裏犯科帳: ジャック・シェパード伝』、『英国競馬事典』、『イギリスの競馬サークル』など。本学では「日本語文章表現」、「国際連携ゼミ」、「統合指導ゼミ」などを担当。

▶ 高橋 幸次(国際ファッション専門職大学教授)

1984年東京大学大学院人文科学研究科修士課程美術史修了(文学修士)。1985~99年東京国立近代美術館に勤務。1999~2019年日本大学芸術学部教授。2019年より現職。専門研究領域は、近現代美術史、特にフランスの彫刻家オーギュスト・ロダン(1840-1917)とその周辺。著書に、『ロダンの言説輸入と高村光太郎「道」について』(小田原のどか編著『彫刻1』トボフィロ、2018)、『「ロダンの言葉」とは何か』(三元社、2019)など。訳書にモニック・ローラン『ロダン』(中央公論社、1989)など。『カミュー・クローデル展』(メルシャン軽井沢美術館、2006)など展覧会企画・参加も行っている。本学では、「美とファッションの歴史」、「ヨーロッパの社会と文化」などを担当。